

地域と連携した教育的宿泊行事に関する一考察 — スクールメリットを活用して —

北濱 幹士^{*1}

Overnight Educational Field Trip in Cooperation with the Community — Taking Advantage of School Benefits —

by

Kanji KITAHAMA^{*1}

(received on Mar. 19, 2020 & accepted on Aug. 3, 2020)

あらまし

本研究では、地域と連携した「たかなわ子どもカレッジ」事業に基づいて実施した、宿泊行事＜海洋調査研修船「望星丸」を見に行こう＞を振り返ると共に、参加者及び保護者から感想、満足度・期待度、そしてどのようなプログラムを求めているのか、またその教育的効果についてアンケート調査から探った。本プログラムは「海洋」をテーマとし、大学のスクールメリットを活かした独自のプログラム構成をした（海洋調査研修船、海洋科学博物館見学）。参加者からは宿泊行事の企画目的に合致した回答を得る事ができ、同様に保護者からも肯定的な回答を得る事ができた。また、参加者だけでなく、引率補助者においても教育的効果を確認することができた。

Abstract

This study is to summarize the overnight educational field trip as <Let's go to see the Research and Training Vessel *BOSEIMARU*>, and analyze the satisfaction, expectation, free description and so on from participants, and their parents using questionnaire survey. The theme of this program as "OCEAN" and visited *BOSEIMARU* and Marine Science Museum which are belong to Tokai University. In the result of survey, there are many positive answers to match to the theme, and their parents, too. Although this kind of experienced programs are already recognized taking important roles within the participants, but also there are educational effects to the sub-leaders who are university students.

キーワード: 地域連携, 宿泊行事, 教育活動

Keywords: Regional Cooperation, Overnight Educational Field Trip, Educational Activity

1. はじめに

「可愛い子には旅をさせよ」と称されるよう、以前より、子どもの時に様々な体験を得ておくことが重要とされている。特に昨今の価値観やライフスタイルの多様化、或いは子どもの社会性の欠如や意欲の低下等に対して、「体験」プログラムの必要性が高まっている。文部科学省は小学校学習指導要領の中で、総合的な学習の時間として体験活動などを積極的に取り入れること、また異年齢集団による学習などの多様な学習形態についても言及している¹⁾。「体験」する事も目的の一つではあるが、様々な活動を通じて、自立心や主体性を育み、規範意識、人間関係構築力、問題解決能力等を高めることにその重要性が見出されている。現状では、各種学校主催の他、地域（コミュニティーセンターなど）やスポーツ団体等が主催する多種多様な体験プログラムが各地にて展開されている。

高等教育機関が青少年・少女のプログラムを実施する場合は、いくつかのカテゴリーに分ける事ができる。各専門分野を活かした独自のプログラムやその効果・評価を測る教育学部系、地域交流も含め実践的な体験ができる各種センター系、或いは地域連携を含め教育委員会等からの委託事業系、そして短期大学や生涯学習センター等が実施して

いる地域連携・協働の目的を持った「地域学・地元学」などである。実践的な体験ができるセンター系の場合、小学生の親子を対象とした野菜や草花の栽培体験教室が挙げられ、幼少期に自然体験（植物栽培）をすると情操及び社会性の向上がみられるとの報告がされている²⁾。委託事業系の場合、交流モデル事業期間が終了、或いは委託支給金が無くなった時点で活動が終了する事も少なくはない。しかし、事業として始まった活動を終えるのではなく、新たな活動目的を持って地域に根ざした活動を継続していく団体もある³⁾。地方の大学・短期大学や生涯学習センターは、地域連携・交流・協働として地域に根ざした地域開催のプログラムを実施している。教育プログラムの一環として授業に組み込み、地域に出て、地域の方々に教を乞い、協働で何かをする事が多く、その多くは地域活性を目論んでいる⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

小学校学習指導要領内に総合的な学習の時間を含めている以上、各種体験プログラムは益々計画・実施されていくと考えられる。しかし、プログラム実施に至っては様々な問題が存在しているのも事実である。文部科学省は、「一般的に宿泊を伴う体験活動においては3泊4日以上での体験日数を確保することが望ましく、これを宿泊体験活動のモデル的な期間とすべき」と示している。岡山県の小学校長期間宿泊体験活動推進プロジェクトでは、3泊4日で異なったテーマを持つ5つのモデルプログラム（困難克服型・海モデル、困難克服型・山モデル、ふるさと探求型モデル、海の

^{*1} 高輪教養教育センター 准教授

Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus,
Associate Professor

生活体験型モデル、そして自立生活型モデル)を設定、実施している (Table 1 参照)。各プログラムでは「ねらい」が達成できるよう、テーマに沿った活動が行われており、調査結果からは、参加児童及び保護者ともに肯定的な回答が示されている⁸⁾。しかし、長期休暇を除いては、3泊4日の活動日数を確保する事は困難であり、多くの小学校では週末等を利用した1泊2日の宿泊体験活動が中心となっているのが現状である。1泊2日での開催をしている小・中学校は約半数であり (小学校 59.6%, 中学校 41.5%), 1泊2日と2泊3日を併せた割合は、小学校が 92.7%, 中学校が 95.1%である⁹⁾。つまり、文部科学省が推奨する3泊4日の集団宿泊活動の実施は現状に見合わないが、日数が短くとも集団宿泊活動のプログラムの重要性は認知されているものと思われる。

本稿では、港区と東海大学との連携事業「たかなわ子どもカレッジ」と共催した「東海大学清水キャンパス宿泊行事<海洋調査研修船「望星丸」を見に行こう>」について振り返ると共に、参加者及び保護者に対して行ったアンケートより以下の事柄を探る (プログラムへの期待度、満足度、参加者の変容、今後の体験プログラムについて)。本研究の目的は、今後の体験プログラムの妥当性を含み、参加者と保護者それぞれがプログラムに対して何を希求しているのかについて探ると共に、その教育的効果を確認することにある。

Table 1 Five Different Themes of Model Programs

プログラム名称	プログラム設定概要
困難克服型 海モデル	無人島を目指してチャレンジする カッター訓練を2回設定
困難克服型 山モデル	20km ウォークで友達同士が 助け合える場を設定
ふるさと探求型 モデル	今まで知らなかった地域の良さを 探求する活動を設定
海の生活体験型 モデル	山間地域の児童が 海を満喫する活動を多く設定
自立生活型 モデル	自分たちで考え、自分たちで行動する 時間と場所を設定

2. 清水キャンパス宿泊行事

2.1 概要及び目的

「たかなわ子どもカレッジ事業」の目的⁺¹⁾に則り、東海大学のスクールメリットを活かした「専門的なテーマを学ぶ機会を提供」として「海洋」をテーマとして掲げた。昨年度は、「親子 de 歩育」(東海大学高輪キャンパスから代々木キャンパスまで親子で歩く企画¹⁰⁾)をたかなわ子どもカレッジ及び Takanawa 共有プロジェクト⁺²⁾の学生と共に実

+1 東海大学と連携して同大学内の学校施設等を活用し、児童が放課後に過ごせる居場所を設置し、学習、スポーツ、遊びなどの活動を行うとともに、同大学の知的・人的資源を活用して専門的なテーマを学ぶ機会を提供することで、児童の自主性、社会性及び創造性を養い、地域交流や多世代間交流を推進します

+2 東海大学チャレンジセンター Takanawa 共有プロジェクト：
<http://deka.challe.u-tokai.ac.jp/tpk/index.html> (2020.3.13 閲覧確認)

施しており、今回は2回目の企画である。

本企画を計画する上で、教科等の学習に関連づけることで高まる集団宿泊活動の教育効果に示されている「社会に開かれた教育課程の実現¹¹⁾」を参考に、「教育プログラム」として以下の3点に注視した (①何を学ぶか、②どのように学ぶか、③何ができるようになるか)。つまり、能動的に学ぶアクティブラーニングを意識した。一つ目の「何を学ぶか」については、「海洋」をテーマとし、東海大学が有する海洋調査研修船「望星丸」の乗船及び見学、海洋科学博物館の特別見学(夜の水族館)である。「どのように学ぶか」は、「お楽しみの宿泊行事」にならぬ様、参加者がテーマに沿った明確な学びの意思を持つことである。これは、事前説明会の中で訪問先についての説明時間を設け (2.2 にて詳細説明)、出発前までに事前調査し、質問事項を作成しておくよう宿題を課した。アクティブラーニングの実践には、受け身で与えられる「体験」だけで留めず、積極的に学べる環境づくりを各家庭から構築していくことが大切であり、家庭の協力無しでは難しい。最後の「何ができるようになるか」は、宿泊研修を通じて参加者各々の成長を促す事である。主観的かつ単発的な「体験」だけではなく、体験を契機に中長期間的に向けた継続的で発展的な変化を促すと共に、連続的・進歩的に「経験」へと繋げ・繋がる事である¹²⁾。例えば、今回の宿泊研修で、「海洋」に興味を持ち、将来的には海洋学部へと進学して海に携わる職業に就く、或いは魚に興味を持ち釣りを一生涯の趣味にするなど「何ができるようになるか」は様々である。

能動的に学ぶ事を意識し、たかなわ子どもカレッジ担当者が、本行事の「しおり」を「乗船券」として作成した (Fig. 1 参照)。目的、約束事、クルー (引率者)、持ち物、タイムスケジュール、活動にあたっての注意点、連絡先等が記載されている。なお、本乗船券は、参加者用、引率者用、そして保護者用と3種類あり、記載内容は使用者によって多少異なっている。

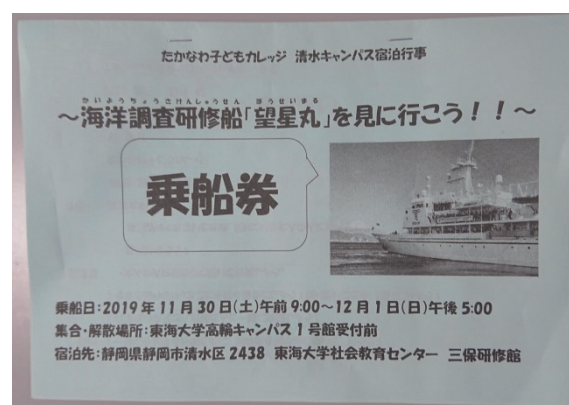


Fig. 1 Boarding Pass as Program Guide

2.2 プログラム

上記した概要及び目的を踏まえ、たかなわ子どもカレッジ担当者に本宿泊行事を提案し、実施予定日の約6ヶ月前に当たる2019年6月に現地を下見訪問し、東海大学清水キャンパス清水事務課企画調整担当者、東海大学海洋科学博物館担当者、そして三保研修館の担当者と綿密な打ち合わせを行い、プログラムの確定へと至った。同日程中には、海洋研究開発機構 (JAMSTEC) が保有する地球深部探査船「ちきゅう」の一般公開を含むイベントが清水港日の出ふ

頭で開催されていたが、本行事中は人混みを避けて非日常的な環境で多くの大人に囲まれて、ゆっくりゆったりの人びりと共に過ごす事を最優先とした。

2019年11月14日、参加希望者は親子で参加必須の事前説明会を実施した。事前説明会では、参加希望の親子に概要と目的、訪問場所、宿泊施設等の説明、そして、参加者と引率者（補助の大学生を含む）の紹介の場とした。

本研修とした1泊2日の清水キャンパス宿泊行事の実施プログラムは下記のとおりである（Table 2 参照）。1日目は、望星丸と海洋科学博物館（夜の水族館）、2日目は海洋科学博物館をメインプログラムとし、子ども達の体調及び天候次第で世界文化遺産の構成資産でもある三保の松原及び東海大学清水キャンパスへの訪問をサブプログラムとして予定していた。しかし、1日目の港区から清水市までの移動時間が交通渋滞により予想以上に長く費やす事となり、望星丸の見学時間の変更は余儀なくされた。移動のバス車内では、参加者の体調を最優先にサービスエリアでの休憩を増やし、学生によるバス内レクリエーションなどで楽しく過ごし、体調不良の子どもは皆無であった。

メインプログラムの1つである望星丸の見学は、係留されている岸壁（通称：鉄道岸壁）より船内の食堂へと入り、望星丸事務長より船内の諸注意及び船内見学の説明を受けた後、船内見学とロープワークの2つのグループに分かれた。更に、船内での怪我や迷子防止の為3つの小グループ（1グループが3~4名）を形成し船内見学を行った。海洋学部航海工学科航海学専攻の学生（以後、練習学生）2名がグループの前後を歩き、参加者に質問をしたり、質問を受けたりしながら船内を巡った。参加者の興奮の音が聞けたのは、ブリッジ（艦橋）である。ブリッジの外へ出て、借用した双眼鏡で周囲の眺望を満喫し、ブリッジでは練習学生より様々な計器の説明を受け、最後は1人ずつラダー（舵）を握って記念撮影を行った。また、食堂で行ったロープワークでは、乗組員や練習学生と共に短めに用意されたロープを結んだり解いたりを繰り返し船舶独特の結び方を学んだ。後部甲板にて富士山を背景とした集合写真を撮影し、下船した（Fig. 2 参照）。

海洋科学博物館のプログラム（夜の水族館）は、入館後別室にて魚の発光、集団行動などについて学んだ後、残りの時間が自由見学となった（1部制限区間有）。館内は照明が落とされて薄暗くされており、博物館スタッフが設置した点滅赤色灯の下、発光している魚を確認したり、海洋水槽に、或いはクラゲギャラリーにくぎ付けになったりして参加者それぞれが満喫していた。自由時間終了後は別室に戻り、発光や集団行動に関する振り返りや質問時間となり、各自が準備してきた様々な質問を博物館スタッフに問いかけた。また、夕食後の学生による夜の集いでは、海洋に関するクイズゲームで知識と交流を更に深めた。

2日目は、夜の水族館では行く事ができなかった2階の科学博物館へと上がり、展示物を見たり、実験装置を動かしたりして海洋に関する知識を広げた。当日は、12月にも関わらず非常に暖かく、朝から雲一つない快晴で富士山が綺麗に見えた事もあり、海洋科学博物館の自由見学を1時間で切り上げ、三保の松原で過ごす時間を長めに取り砂浜での遊びを楽しんだ（Fig. 3 参照）。三保の松原での昼食を予定していたが、早めに清水を出発して昼食は休憩も含めて途中のサービスエリアで取った。帰路も交通渋滞に巻き込まれ、当初の予定より少し遅れての到着、そして解散となった。

Table 2 The Program of Let's Go to See
The Research and Training Vessel *BOSEIMARU*

時間	プログラム概要
1日目（2019年11月30日）	
9:00	東海大学高輪キャンパス 集合・出発
12:20	昼食（富士川 SA）
14:15	望星丸見学（鉄道岸壁停泊）
16:00	三保研修館へ移動
17:30	東海大学海洋科学博物館（夜の水族館）
18:30	夕食
19:30	学生による夜の集い
20:15	入浴・就寝準備
21:30	消灯（22時よりスタッフ会議）
2日目（2019年12月1日）	
7:00	起床
7:15	体操・朝の集い
7:30	朝食
8:15	部屋の片づけ
9:00	三保研修館出発 東海大学海洋科学博物館見学
10:00	三保の松原へ移動
11:30	三保の松原出発
13:30	昼食（富士川 SA）
17:30	東海大学高輪キャンパス 到着・解散

交通渋滞などにより、予定を変更せざるを得なかったため、予定ではなく実際のスケジュールを掲載する



Fig. 2 Group Photo at *BOSEIMARU*



Fig. 3 Group Photo at *MIHO-NO-MATSUBARA*

2.3 参加者

高輪地区総合支所管内に在住または高輪地区総合支所区域内の小学校に在籍する児童を対象とした。宿泊が伴うため、たかなわ子どもカレッジ担当者と協議し、1人で身の回りの事ができる年齢として、参加条件を小学校3年生以上とした。半分の公立小学校が登校日などの事情もあり、参加小学生は22名であった（Table 3 参照）。引率者は、Takanawa 共育プロジェクト所属の大学生が男女3名ずつの計6名（3年生1名、1年生5名）、たかなわ子どもカレッジより女性が1名、高輪子ども中高生プラザより男女1名ずつ、そして東海大学教職員の男性2名の総勢33名である。参加者の男女比は男子が7名、女子が15名と女子が約3分の2を占めた。学年別では、3年生が約過半数を占め、4年生と合わせるとほぼ総数に近い数である。兄妹で参加した1組を除くと、1人での参加が多く、異なった小学校からの参加である。

各所での移動の際には、参加者の年齢層を基本として、4つのグループを形成し（3年生2グループ、4年生・6年生1グループ）、引率者2名及び引率補助の学生6名が各グループと共に行動した。

Table 3 Profile of Participants

学年	男子	女子	合計
3年生	3	9	12
4年生	2	4	6
5年生	0	0	0
6年生	2	2	4
合計	男子 7名	女子 15名	総数 22名

2.4 宿泊及び食事

宿泊及び食事にもスクールメリットを活用し、東海大学三保研修館を利用した。参加者や保護者が懸念するであろう宿泊と食事については、事前説明会の際にホームページや写真を用いて紹介をした。具体的には、ホテルではなく研修施設である事を前提に、布団の上げ下ろしやTVが設置されていない等である。宿泊部屋は、男子全員で1部屋、女子は3年生部屋と4・6年生部屋に分かれ、引率補助の学生が参加者と同部屋にて就寝した。

食事に関しては、1日目夕食と2日目の朝食はバイキング形式とした。食事前はグループごとに着席し、自らが節度を持って食品を装い・食すことなどを伝えた。移動を伴う1日目昼食は家庭から持参とし、2日目昼食は弁当とした。なお、事前に食物アレルギーチェックを行い、投薬などの徹底管理を行った。

3. アンケート調査

調査対象者は、参加者とその保護者であり、それぞれ設問が異なったアンケート調査を実施し、その回答を取りまとめた。アンケートの回収率は、子供向けが100%⁺³（N=22）、保護者向けが23%⁺⁴（N=22）である。各アンケートの質問項目については下記に別途記す。なお、本調査は

+3 帰路のバスの中で収集した

+4 解散時に配布し、2019年12月9日までにたかなわ子どもカレッジまたは高輪子ども中高生プラザ受付までの持参をお願いした

たかなわ子どもカレッジが実施し、了承を得た後、本稿での使用に至る。

3.1 子ども向けアンケート

全6問で構成されており、重要視している設問は自由記述欄が設けられている。以下の3問が自由記述である「このキャンプに参加した理由」、「何が楽しかった？楽しくなかった」、「今後、どのような体験プログラムをしたいか？」。その他、「満足度」は5段階評価、「食事」及び「大学生と一緒にいけてどうだったか」は4段階評価である。

3.2 保護者向けアンケート

全7問で構成されており、行事に関する情報入手先から今後のプログラムまで設問内容は多岐に渡る。始めの2つの質問は宿泊行事前の事柄として、「行事を知った媒体」（4項目より該当項目へのチェック）、「宿泊研修前、保護者が子どもに期待した事柄」（11項目より選択）がある。次に、「保護者の満足度」及び「子どもの変容」を4段階評価と自由記述である。最後に子ども向けアンケート同様に、今後のプログラムについての自由記述欄が設けられている。

4. アンケート調査結果

4.1 子ども向けアンケート

最初の設問は、自由記述の「このキャンプに参加した理由」である。諸種の理由であるが、「面白そうだったから」「楽しそうだから」「お泊りが好き」「船に乗れるから」「水族館にいける」「親と離れてのキャンプだから」などであり、プログラム内容に興味を持って参加したように見受けられた。

参加者の満足度は、5段階評価で一番高いくとても楽しかった>が21名であり、その内1名は「楽しすぎた来年もあったら絶対行きたい」と設問の横に記されていた。残りの1名は<ふつう>に記しが付けられていた（Table 4 参照）。「何が楽しかった・楽しくなかった」の理由（自由記述）では、「みんなと風呂に入ったり、とにかく色々な事が楽しかった」「全部」「夜の水族館」「船に乗ったこと、お土産、お泊り（全体的に楽しかった）」「お部屋で新しい友達と遊べたこと、船を見学したこと、海に行ったこと」など挙げられていた。

キャンプ中の食事については、<とてもおいしかった>が19名、<おいしかった>が2名、そして<ふつう>が1名の結果であった（Table 4 参照）。

大学生と一緒にいけてどうだったかでは、<とてもよかった>が19名、<よかった>が2名、そして<ふつう>が1名であった（Table 4 参照）。

最後の設問は、「今後、どのような体験プログラムをしたいか（自由記述）」とした。「親と離れてキャンプしたい」「キャンプやバスハイクに行っておもしろい一日を過ごしたい」「バーベキューやマシュマロ焼き、夜の映画館」「富士山に登りたい」「山形で鮎の掴み取り」「また、大学生と行きたい」「スキー・スケート」「3泊4日が良い」「何かの体験」「動いている船に乗りたい」「望星丸のエンジンルーム」と1問目同様に様々な意見が収集できた。

Table 4 The Scale Questions for Children (N=22)

参加者の満足度	
21	とても楽しかった
0	楽しかった
1	ふつう
0	あまり楽しくなかった
0	全然楽しくなかった
キャンプ中の食事	
19	とてもおいしかった
2	おいしかった
1	ふつう
0	まずかった
大学生と一緒にいけてどうだった	
19	とてもよかった
2	よかった
1	ふつう
0	あまりよくなかった

4.2 保護者向けアンケート

最初の設問では、本プログラムの広報認知度である。「この行事の企画を何で知りましたか（複数回答可）」は、1) カレッジ通信 3 名、2) ポスター掲示 1 名、3) チラシ 3 名、4) 口コミ 0 名、「学校からも配布されました」と別記もあった。

選択設問である「宿泊研修前、保護者が子どもに期待した事柄（複数回答可）」では、いろいろな体験が 100% を占め、友達づくり、友達との交流・異年齢集団交流と続いた（Table 5 参照）。

保護者の満足度調査（4 段階評価）では、＜とてもよかった＞が 3 名、＜よかった＞が 2 名となり（Table 6 参照）、その理由（自由記述）では、「自宅に戻ってから、行事中にあった出来事を次から次へと楽しそうに話しておりました」、「普段入ることができない大学のキャンパス（船）や夜の水族館などに大学の先生・生徒の方々と一緒に行くことができた」、「短すぎてもっと泊まりたかったと言っていたので、とっても楽しかったようです」などが記入されていた。

子どもの変容調査は 4 択とし、その理由は自由記述とした（Table 6 参照）。4 段階中上位 2 つの＜期待通りに成長＞が 3 名（「友達どうし仲良く楽しく過ごせたようで良かった」）、＜まあ成長＞が 2 名（「荷物は整理できていなかったが、忘れ物がなく持ち帰れたので自立性が育ったと思う」）であった。

最後に「今後、どのような体験プログラムを希望されていますか」の次回へと繋がる設問を設けた。「普段行けないような場所で、気づきがあるような楽しいプログラム」、「大学生と一緒に体験できるプログラム。宿泊や遠足は家族ではなく、友達や先生と行くことで新しい出会いや色々な経験する事により成長できると思う」、「J-Crew プロジェクトの DVD を観ており、船舶関係に興味があった」などの答えが得られた。この 3 つの回答は、今回のプログラム自体が示唆されているが、今後も同様の「海洋」をテーマと

したプログラムが求められているのではないかと示唆される回答であった。

Table 5 What Parents Expected of their Children before the Program (N=5)

回答数	設問
5	いろいろな体験
4	友達づくり、友達との交流
4	異年齢集団交流
2	協力しあう心、協調性の向上
2	積極性、自主性の向上
2	強い精神力、忍耐力向上
3	集団行動体験（社会性の会得）
3	自立心育成
2	自律心向上
3	優しさや思いやりの醸成
0	「期待する事」は特になし

Table 6 The Scale Questions for Children (N=5)

満足度	
3	とてもよかった
2	よかった
0	ふつう
0	よくなかった
子どもの変容	
3	期待以上に成長
2	期待通りに成長
0	まあ成長
0	変化はみられない

4.3 学生向けアンケート⁺⁵

たかなわ子どもカレッジが引率補助をした大学生に対し、「子どもと関わる活動についてのアンケート」を行った。本アンケートは、全 7 問で構成されており、＜はい・いいえ・どちらでもない＞の回答に対しての理由を記載する設問体系である。なお、参加した 6 名全員より無記名でのアンケート回答を得た。

最初の設問である「子どもたちと関わる活動は楽しいですか」は、全員が＜はい＞と答え、その理由として「子どもが好き、一緒に盛り上がる事ができると楽しい、色々な子どもたちの姿をみるのが楽しい、同年代の弟が居て関わることが楽しい」である。次に「子どもたちと関わる活動は自分のためになっていると感じますか」でも全員が＜はい＞と回答した。その理由は、「心が豊かになりそう、人に優しくなれそう、子どもたちと関わる事が新しいことに気付ける、子どもの目線ならではの観点を知れるので楽しい、自分も学べる事が多い、子どもがどんな事が好きなのか知れる、将来的に自分の子どもに対する言動の基礎になる」である。「実際に子どもたちに関わって困ったことや疑問に思った事」の設問では、「子どもたちのしている危ないことをどこまでいったら止めるべきか、氏名を覚えるのが難しかった、子どもとの距離感が難しい、一度に話しかけられたときの対処が難しい」と引率補助としての責任感を感じさせる回答が見受けられた。「今後も機会があれば子どもたちと関わりたいですか」でも、全員が＜はい＞と回答した。最後に「子どもたちと関わっての感想」では、「子

⁺⁵ 子どもと関わる活動についてのアンケート：たかなわ子どもカレッジが東海大学の学生用に作成したアンケートであり、授業や共催プログラム後に収集されている

どもと関われる場をありがとうございます、子どものテンションが上がるポイントが予想と異なっていて驚いた、若さから元気がもらえた」などの回答である。

5. 考察

行事企画名を「海洋調査研修船「望星丸」を見に行こう」と明確な目的を記したことで、「海洋」に意識が高い小学生が集まった。事前説明会では、概要・目的、宿泊・食事施設の他、望星丸について（教育・研究活動）、「海のはくぶつかん」としての海洋科学博物館、水圧と水深についての講話を含め、参加者・引率者全体が集った事で、保護者への理解も高く「教育プログラム」としての意義を持つことができたように思われる。事前説明会終了時には、「親子で参加するプログラムには成りえないでしょうか」との質問を受け、親子を対象にしても「海洋」のテーマは需要があるのではないかと感じた。

本アンケートで得られた肯定的結果には、外的要因が大きく関係していると考えられる。実施した1泊2日は冬晴れの好天に恵まれ、12月にも関わらず海水に触る事もできた。また、参加者に22名に対して引率者が11名と非常に多く、参加者が1人で行動するなど寂しい気持ちになる事は無かったと思われる。望星丸の船内では、多くの練習学生が全ての行動に対してサポートをし、下船時には船外まで出て見送りをしてくれた。プログラム全体としても当初の予定通り、人混みも慌ただしい時間もなく、非日常的な環境で多くの大人に囲まれて、ゆっくりゆったりとのんびりと過ごすことができた。

参加者の年齢層は、高学年が多いと予想していたが、それに反して最低学年の小学校3年生が半数の12名、そして4年生が6名を占めた。従って、全ての行動は3年生の体力、行動力に合わせざるを得なかった。最上級生の6年生4名にとっては、少し物足りないプログラムであったと推測されるが、食事の準備・片付け、布団の出し入れ、就寝・起床、集合・出発等において模範的かつ下級生をリード・サポートする姿が多く見受けられ、3・4年生にとって大きな存在であった事は間違いないだろう。また、引率者側にとっても非常に頼れる6年生の存在であった。

問題点の1つとして移動時間が挙げられる。往路・復路共に移動時間は十分に確保していたが、天候が良かった事もあり、思いのほか交通渋滞がひどかった。しかし、訪問先は本学が有する「望星丸」であり、事務長に事情を伝え臨機応変に対応して頂くことができた事は、スクールメリットの1つである。勿論、本学最寄りの品川駅より東海道新幹線で静岡駅、そして清水駅の交通手段も思案したが、金銭的、現地での交通手段的、そして何より多くの小学生を引率する場合において最適手段とは考えにくい。今後は、出発時間を早める事で可能な限り渋滞を回避する事を踏まえたスケジューリングを提案する。次の問題点は予算である。本プログラムは、幾つかの組織が連携した事業の一環である。つまり、参加者の自費清算ではなく、区の補助金等を含めた上での清算をしなければならない。また、宿泊行事における区の参加費が設定されており、より良いプログラムを提案したとしても予算超過する場合はプログラムの取捨選択をせざるを得ない。

最後に本アンケート調査であるが、数的評価としては十分なサンプル数とは言えないが、宿泊行事（体験活動）そのものを評価する事も難しい¹³⁾。本研究の目的は数値的評

価ではなく、プログラムの妥当性また教育的効果の認識であり、参加者、保護者、そして学生の率直な回答・意見を率直に捉えたい。

5.1 子ども向けアンケートより

「船・水族館（魚）・海」のキーワードが複数回挙げられており、本プログラムの企画に合致した満足感が得られたことが確認できた。食事及び大学生の同行の質問からは、大勢で食事や行動を共にすることが少ない現代の子どもたちを象徴しているように思われた。

アンケート全体としては、全体的に肯定的な結果を示す中、1名のみが全ての段階の評価にて「ふつう」を記し、最後の自由記述設問では、「気が向いたら」と書き込んでいた。あくまでも「ふつう」であり、否定的な意見・記述ではないが気になる回答ではあった。

5.2 保護者向けアンケートより

本プログラムの情報は、カレッジ通信及びチラシで得た事が明確になり、高輪地区で子ども向け企画の広報は、なかなか子どもカレッジからの情報（カレッジ通信及びチラシ）が有意である事がわかった。

保護者の期待は、「いろいろな体験をさせたい」が多く非日常的、或いは珍しい体験プログラムを期待している事がわかった。また、友達（異年齢）との交流、集団行動体験も期待度が高く、核家族化が著しい高輪地区ならではの回答と示唆される。

参加者の満足度が高かった事が保護者としても満足度の肯定に繋がったと思われる。保護者としては当然の事かもしれないが、子どもが笑顔で帰宅し、2日間に渡っての出来事を話してくれる事が何よりも保護者の満足感であると考えられる。

今後のプログラムに関しては、子ども同様に様々ではあるが、特殊性を持ったプログラムに興味がある事がわかった。「船舶関係に興味がある」と回答されていた保護者の最後は、「今は船員になりたいと言っています」で締めくくられている。影響を受けやすい子どもだからこそ、様々な体験を得て、夢を現実へと中長期的に発展する「経験」に繋がっていく事を切に願う。

5.3 学生向けアンケートより

本プログラムが大学生へ与える教育的効果は、アンケートの回答からも垣間見えた。今後、引率補助を体験した大学生に本プログラムの本質的な教育的効果が多く表れると思われる。本プログラムの趣旨に賛同して参加している大学生であるが故に、肯定的な回答が得られる事は当然の事である。しかし、大学生自身が子どもたちと接する中で、色々と考え、悩んでいた事がわかった。まず、子どもたちと関わることで「心が豊かになりなりそう、人に優しくなれそう」との回答は情操教育的効果の表れだと考える。「子どもたちのしている危険な行動をどこまでいったら止めるべきか」の回答の中には、学生の心の格闘が見え隠れしている。その場の状況によって「取るべき行動」、つまり正解は異なってくるであろう。全てを管理するのではなく、危険の範囲を見定め、「どこまでいったら止めるべきか」を勘案し、事故や怪我へと至る前に行動を止めさせる状況判断は非常に難しい。リスクマネジメント上の危機管理や事故防止も経験に裏付けされる事も多々ある。つまり、怪我や事故に限らず、自らが触れ、体験し、理解する事を通して

学び取る参加型の学習法（実学）である¹⁴⁾。

小中学校での集団宿泊活動の日数縮小、或いは中高等学校での課外活動（合宿）の減少、更には核家族化等の現状を踏まえると、現在の大学生にとっても集団宿泊研修は重要な意味があり価値が高いと思われる。ある程度の責任を持った立場（補助）で参加することによって社会性が得られる他、協調性、規範意識、人間関係構築力、問題解決能力等の多種雑多な「生きる力」を育むと共に高める事ができる「実学」へと繋げる事が可能となる¹⁵⁾。従って、大学生には青少年・少女団体の諸活動に参画し、異年齢集団等の中で多くの人と接する「実学」を通じて、多様な学びを深める事を強く推奨する。

6. まとめ

地域と連携して実施した「東海大学清水キャンパス宿泊行事＜海洋調査研修船「望星丸」を見に行こう＞」を振り返ると共に、参加者・保護者のアンケート調査から体験プログラムの妥当性及び今後のプログラム、そして引率補助学生からも教育的効果を確認する事ができた。参加者からは、多くの肯定的な意見が見られ、保護者の満足度も有意であった。また、保護者は様々な体験を友人と共にさせたいと願っている事もわかった。このようなプログラムは参加者のみならず、引率者側を担当した大学生にも多くの事柄を学ぶ「実学」の場としての重要性も認識できた。そして何よりも喜ばしい事は、参加者・引率補助者・引率者の全員が病気や怪我も無く、元気に笑顔で助け合いながら1泊2日を過ごせた事である。今後も東海大学のスクールメリットを活かし高輪地区の子どもたち及び保護者に対して「専門的なテーマを学ぶ機会を提供」できるよう関係各所と協働して、より良い「教育体験プログラム」を展開していく予定である。

7. 謝辞

今回のプログラムは、関係各所の協力体制無しでは実施が考えられない。たかなわ子どもカレッジ、港区立高輪子ども中高生プラザ、そして引率補助として2日間子どもの生活面を担当した Takanawa 共育プロジェクトの学生。現地での受け入れサポートにご尽力頂いた東海大学清水キャンパス清水事務課企画調整担当の石田課長と課員の皆様、望星丸の見学については、船舶管理室の野陳課長、玉井技術員、住吉望星丸事務長、当直乗組員、そして海洋学部航海工学科航海学専攻の学生諸君、東海大学海洋科学博物館の皆様。本企画に関してのアドバイス頂いた東海大学地域連携センター地域連携課の近藤課長補佐、最後に企画立案から引率まで全面的に協力して頂いた高輪キャンパス地域連携推進委員会に厚く御礼する。

参考文献

- 1) 小学校 学習指導要領（平成29年告示）文部省
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf（2020.3.13 閲覧確認）

確認）

- 2) 三田雅江・梁川正, “栽培経験を通じた「生きる力」の育成 京都教育大学環境教育実践センターにおける小学生の親子を対象とした栽培体験教室での活動から,” 京都教育大学環境教育研究年報, 23, pp.69-77, 2015
<https://www.kyokyo-u.ac.jp/cee/23-7.pdf>（2020.3.13 閲覧確認）
- 3) 吉原さちえ・知念嘉史, “学生有志による地域の子どもたちを対象とした遊びの活動—6年間の活動の振り返りと今後の課題—,” 東海大学体育学部紀要, 第48号, pp.47-57, 2018
https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/physical_education/kiyou/pdf/2018_048/06.pdf（2020.3.13 閲覧確認）
- 4) 長崎食育学, 長崎女子短期大学
<http://www3.nagasaki-joshi.ac.jp/~web10la/30/>（2020.3.13 閲覧確認）
- 5) 公益財団法人 山形県生涯学習文化財団 山形生涯学習センター＞遊学館＞地域学へのいざない＞「山形学」への招待
https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/chiikigaku/chiikigaku_shotai.html（2020.3.13 閲覧確認）
- 6) 北濱幹士・宮川幹平, “特別講座「宗像学」の報告,” 東海大学短期大学紀要, Vol.50, pp.87-91, 2016
- 7) 北濱幹士・宮川幹平・八尋剛規, “特別講座「宗像学」の報告2,” 東海大学短期大学紀要, Vol.51, pp.1-8, 2017
- 8) 小学校長期宿泊体験活動推進プロジェクト 5年間の取組と成果～モデル校の事例をもとに～ 岡山県教育庁義務教育課 平成31年2月
https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/590681_4929755_misc.pdf（2020.3.13 閲覧確認）
- 9) 「小中学校集団宿泊活動に関する全国調査」報告書〔概要〕 国立青少年教育振興機構 平成31年3月
https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/136/File/report_summary.pdf（2020.3.13 閲覧確認）
- 10) 北濱幹士, “地域・キャンパス・学生・教職員間連携交流活動の報告,” 東海大学紀要情報通信学部, Vol.12, No.1, pp.49-52, 2019
https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/information_and_telecommu/kiyou/index/pdf/vol_12_001/PP49-52.pdf（2020.3.13 閲覧確認）
- 11) 集団宿泊活動サポートガイド, “教科等の学習に関連付けることで高まる集団宿泊活動の教育効果,” 国立青少年教育振興機構, 平成30年
https://www.niye.go.jp/files/items/877/File/supportguide_180119.pdf（2020.3.13 閲覧確認）
- 12) 石村秀登, “「体験的な学習活動」に関する一考察—体験と経験の可能性—,” 熊本県立大学文学部紀要, 第16巻, pp.77-87, 2010
- 13) 時代・明石要一, “体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察 —子どもの体験活動事例を追って—,” 千葉大学教育学部研究紀要, 第59巻, pp.167-173, 2011
- 14) 松前達郎:「雑記帖 自然・文明・教育・外交をめぐる」, 松前達郎の会, 昭和59年発行, pp.64
- 15) 山本俊光, “子ども向け宿泊型農業体験プログラムに参加した若者の社会性,” 甲子園短期大学紀要, Vol.35, pp.9-16, 2017